
僕らの自由、僕らの青春4 -時間は受け継がれて-

シルヴィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの自由、僕らの青春4 - 時間は受け継がれて -

【コード】

N08410

【作者名】

シルヴィ

【あらすじ】

暑い夏がやってきた。クーラーなんて洒落たものなぞありはしない文芸部室に何故か集合するSOS団。

そういえば、最近はケータイで時間を見るから、腕時計なんてつけていないな。だが古泉はこのくそ暑い時期になっても、大きなクロノグラフデザインの時計をつけている。ところがその時計は、傷だらけで所々サビも浮いている。俺でも買い替えを決意するレベルだ。

謎の転校生がいつもつけている壊れかけの腕時計、我が団長は見事に喰いついた。しかし、その腕時計には悲しいエピソードが秘められていた…。

(前書き)

過去回想シーンにオリキャラあり。

おなじみの文芸部室の景色。変わったことは制服が夏仕様になったぐらいである。部室はどうしようもなく暑いが、やっぱり夏はいいね。輝く太陽、青い空。冬好きの誰かさんには悪いがな。

「こんにちは。今日はひときわ暑いですね。」

汗一つかいてなくせに何を言うか、古泉。説得力皆無だぞ。

「すみません。涼宮さんがくるまで、明日の予習をさせてください。」

「家に帰ってからやりゃいいだろ。」

「そもいきませんよ。こうでもしないと、勉強が追いつかなくて。」

ほう、そうかいそうかい。特進クラスは大変だな。

「あつっーい!!ちょっと、キョン、あおいでくれる?」

「自分でやれ。」

「神聖なる団長が暑いと言ってるのよ!!さっさと仰ぎなさい!」

「やなことだ。俺だつて暑いんだ。」

ハルヒがくると、部室の温度が10度ほど上がりそうだ。ま、冬場に長門がじつと1人で読書をしていて部室の温度が10度下がるよ。りましではある。

「古泉君、暑いのによく腕時計なんかつけてるわね。時間をみるぐらい、携帯で十分じゃないの?」

「アナログ好きの僕には時計のほうが性に合います。」

この暑いのに、古泉は律儀に腕時計をつけている。しかも、かなり傷が入っていて、正直、俺でも買い換えたくなるようなシロモノだ。「ちよつと見せてよ。」

「ダメです。結構ボロボロになっていますから、見せられるものではありません。」

「いいから見せなさいよ！」

ハルヒが強引に古泉の左腕をつかんだその瞬間、事件はおきた。

「触らないでください！」

「痛いっ！」

古泉が伸びてきたハルヒの右腕をひねり上げた。長門が視線をこちらに向け、朝比奈さんはお盆をかかえたまま怯える。

「離してよ、古泉君、なんで時計ぐらいで…痛い…。」

「よせ！古泉、落ち着け！！！」

そのときの古泉の表情は、明らかに怒っていた。俺が止めなければ、多分ハルヒの腕は使い物にならなくなっていただろう。我にかえった古泉はすぐにハルヒから離れて深々と頭を下げた。

「ごめんなさい、涼宮さん。カッとなつてしまいました。でも、お願いします。どうかあの時計に触らないでください。」

「ちよつと時計見せてつて言っただけなのに、何でこんな痛い目にあわなきやいけないのよ！」

「すみません。」

力なく古泉はそう言い残して部屋を出て行った。気まずい。この空気はあまりにも気まずい。

「ハルヒ、古泉もおかしいと思うけどさ、お前もそこまで強引なことをしなくてもいいだろう。」

「だって、たかだか腕時計でしょ！しかもボロボロじゃないの。そんなもの後生大事につけているほうがおかしいわよ！それにしても、痛いわ。女の子相手に本気でひねるなんて最低よ！」

男の子の俺相手に本気でヘッドロックやローキックをかますお前は、どうなんだ！

「もしかしたら、何か深い事情でもあるんじゃないの？」

「じゃあ、その事情を聞き出してやるわ！！たかだか時計を見せてといったぐらいで、団長に暴力を奮うなんて許せない！」

次の日、それでも古泉は腕時計をつけていた。

「古泉君、わたしに謝ることがあるでしょ？」

「知りません。」

「昨日、わたしの腕をひねり上げたじゃないの！謝りなさいよ！」
ハルヒは机をガンガン叩いたが、古泉は「ミクロンたりとも動じなかつた。」

「拒否します。」

昨日の低姿勢とはうってかわり、古泉は、ありったけの冷たさと怒りをブレンドした目でハルヒを睨みつけている。おいおい、確かお前は、ハルヒの精神安定剤であり、ニキビ治療薬だろ？いつからハルヒ刺激剤に転職したのか？自ら閉鎖空間を誘発してどうするんだ？「機関」から処分喰らうんじゃないのか？大丈夫かよ。

「何よ。団長にむかってその目はなに？」

「あなたは僕が嫌だと言っているのに、無理やり時計に触ろうとするからです。悪いのはあなたです。」

「たかだか腕時計じゃない、しかもボロボロ。見て何が悪いのよ！」
「とにかく、触らないで……」

ハルヒは獲物をとらえた豹のごとく古泉の腕をとらえた。しかし、相手は豹の獲物になるにはあまりにも強すぎた。迫ってきたハルヒの腕をあつさりかわした。容赦なしの平手打ちをハルヒにお見舞いした。ハルヒは後ろにふつとび、しりもちをつく。口を動かすだけで言葉がでない。しかも口内を切ったらしく血をながしている。それでも加減したつもりらしく、利き手じゃない左手での平手打ちだった。それでもこの威力。右手だったら……考えないほうがいいな。

「涼宮さん、何度も言わせないでください。」
「おずおずと朝比奈さんが古泉に近寄る。」

「あ、あの……古泉君、涼宮さんは女の子です。お顔はやっぱり良くないと思います。」

「朝比奈さんは関係ありません！」

立ち上がってきたハルヒが、殴った古泉ではなく、原因となった時計を責める。

「何よ！そんなボロ時計、何だつて言うのよ！」

「涼宮さん、あなたたつて人は！」

「やめろ、古泉！」

「落ち着いて。」

俺は長門と2人がかりで古泉を止めた。自分より大柄で、しかもマジ切れしている男を止めるのは長門の宇宙人的技術がないと無理だった。センキュー、長門。とりあえずSOS団仲間割れ殺人事件は避けられた。ハルヒは荒い息をつきながらも落ち着いて古泉に尋ねる。

「古泉君、何なのよ？たかだか時計でどうして？」

「たかだか？あなたにとつてはそうでしょう。でも、僕にとつてはそれでは済まないことです。」

「それで？それで何だつていうのよ！アタシには関係ないわよ！ちよつと見たいだけじゃないの！」

「いい加減にしろ、ハルヒ！！本人が嫌がつてるのに、強引に触ろうとするからだ！」

思わず俺もハルヒに怒鳴った。古泉は無表情で立ち尽くし、ハルヒは大きな瞳に涙を浮かべて俺を睨みつける。おい、ハルヒ、睨む相手が間違っているぞ。

「な、なによ！ちよつと時計をみせてもらいたかっただけなのに！何でこんなひどい目にあわないといけないのよっ！いい。わたしもう帰るわ！！あとは適当にどうぞ！」

ハルヒは怒りオーラを撒き散らして部屋をでていった。古泉は俺たちに背を向けて、肩で息をしている。お前自ら閉鎖空間を発生させるなんてどうかしているぞ。鉄壁の理性はどこにぶっ飛んでいったんだ。

「すみません、見苦しいところをお見せしました。」

「古泉、その時計は何なんだ？ハルヒじゃないけど、実際、腕時計を見せると言われてそんなに怒り狂うなんて、ちよつと考えられないぞ。」

古泉は時計をはずして机の上においた。ハルヒの言うとおり、確かにボロボロで、まるで道路にたたきつけられたような傷が数え切れないほど入っている。

「これはある人の形見です。」

「形見？」

「ええ。3年前、僕に涼宮さんから力を与えられたとき、どんな状態であったか、あなたにはお話ししましたね。」

「ああ。」

「当時の僕はあの現実が受け入れられず、それは大変な状態でした。そんな僕をいつも気にかけてくれたのが、当時の「超能力者」たちのリーダーでした。カッターナイフを持って暴れる僕を、身を挺して保護してくれました。僕はその人に、たくさんケガをさせてしまったけど、その人は怒ることも無く、ただ僕を強く抱きしめてくれました。改めて閉鎖空間に入り、初めての「狩り」に怯える僕を勇気づけてくれた、僕にとって兄同然の人です。それは同じ力を持つ者全員にとってもそうであり、僕たち「超能力者」仲間にとって一番大切な人でした。でも、戦闘中に僕がミスを犯してしまい、僕をかばって、その人は亡くなりました。」

俺、長門、朝比奈さんは古泉を見ることしかできなかった。古泉の表情は本当に悲しそうで、信じがたいことに、古泉は泣いていた。人前で涙を流していた。

「それは、その人の時計ですか？」

朝比奈さんがおずおずと聞く

「ええ。そうです。僕にとって、とても大事な時計です。だけど、わかっているつもりだけど、この時計だけは涼宮さんに触れてもらいたくない。昔の僕が叫ぶのです。「あの人はこの女に殺された！」ってね。」

古泉は涙を乱暴にぬぐって、無理やり作った笑顔を朝比奈さんにむけた。

「おかしな話ですよ。朝比奈さん。」

「古泉くん、つらかったでしょう。悲しかったとおもいます。でも、過去は帰ってきません。亡くなった方は帰ってきません。古泉くんならわかっていると思います。」

「もちろんわかっています、朝比奈さん。でも、それだけでは済ませられないものがあるのです。この時計があるから、僕は正気を保っていられる。ちなみに、この時計の持ち主が亡くなってからまだ半年しかたっていないません。僕の中でまだ心の整理がつかないのです。ましてやその原因である涼宮さんに、無邪気な好奇心で触られることが、僕には耐えられません。」

長門が古泉の左腕をじつと見ていた。俺もつられて、つい左腕を長門より近い距離で覗いてみる。そこにはリストカットと思われる傷跡が何本もあり、そのうち2本はかなり大きな傷跡だった。多分この2本は一生残りそうだな。だが、それにはあえて触れないでおく。いずれ教えてくれる時を待とう。話すつもりがなければそれでいいが、ハルヒはどうなんだろうなあ。

「だから、夏は好きじゃない。この時計がむき出しになるから。早く秋が来てほしいとも思います。」

「悪いけど、時計、触っていいか？」

「どうぞ。手にとっていただけでも結構ですよ。涼宮さん以外の方なら平気です。」

たしかに、見るに耐えないぐらいの傷だ。俺でも買い替えを決断するぐらいの傷。でも、破損はしていない。きつちりと動いているし、ちゃんと時計版も見える。バンド部分も傷だらけだが充分に使用に耐えうる状態だ。事実、古泉は毎日その時計をつけている。この時計の最初の持ち主は、もうこの世にいないが、次の持ち主となった古泉を見守るために、時計は動き続けている。

ピリリリリリ

「おっと、閉鎖空間出現ですね。今回は100パーセント僕の責任

です。しっかりやってきます。」

いつもの笑顔に戻って古泉は、手を振りながら部室を後にした。

「古泉君、ものすごくつらかったでしょうね。人前で泣くぐらいですから、本当に、本当にその人を慕っていて、でも自分を庇って亡くなられたのですから、やっぱり自分を責めてしまいますね。涼宮さんに時計を触られたくない気持ちもわかります。」

朝比奈さんがしんみりとして、静かに泣き出した。完全にもらい泣きしているみたいだ。くおら、古泉！スウートマイエンジェルを泣かすなんてどういっつもりだコノヤロー！！

「3年間蓄積された負の感情。あの時計がそれを緩和している。」

「形見…か。」

ハルヒに触られるのを極端に嫌がるのが理解できる。ハルヒが原因の閉鎖空間で大切な人を失った古泉の悲しみとハルヒに対する恨みがああ時計に閉じ込められ、なお時計は動いていく。「機関」の一員として、閉鎖空間を発生させないように、ハルヒのイエスマンになりながらも、決して当時の苦しみや、その人の思い出を風化させないために、これからもあの時計をはずすことはないのだろう。ましてや亡くなってから半年しかたっていないのであれば、心の整理はつくわけもない。

学校帰り、俺はハルヒに電話を入れた。

「なに、キヨン。」

「今日のことだけど、なんでお前、そんなに古泉の時計が気になるんだよ。」

「別に。いまだき腕時計しているなんて珍しいし、しかもあんなにボロなんだもん。気になるわ。」

「あれは、古泉にとって大事な時計らしい。本人が嫌がっているんだ。お前も強引に触るな。」

「何よ！私が悪いの！？ただ時計が見ただけなのになんでアンタにまで怒られないといけないの！？」

「小学校で習っただろう？人の嫌がることはしてはいけませんって。古泉はマジで嫌がつてるんだからやめとけよ。」
無言のまま電話は切れた。まあいい。ハルヒは納得したと強引に解釈しておこう。

翌日、部室に現れた古泉は、両腕に包帯を巻き、顔にもたくさんの擦り傷を作ってやってきた。

「へっ、こ、古泉くん、大丈夫ですか？」

「ええ。骨さえやられなければ。こんなものケガのうちに入りません。」

「古泉一樹、構成情報の修正を行えるが、あなたの意思は？」

「長門さん、お気遣いありがとうございます。時間がかからないのであれば顔の傷をお願いできますか？」

顔の傷？男だったらそんなものにこだわらな。お前は将来芸能人でもなるつもりか？

「顔の傷は目立ちます。ケガをした理由を他人に詮索されるのがうっとうしいからですよ。」

確かに。まあ、ついでだからお前に忠告しておこう。1年生の間で「5月にきた9組の転校生、学校では大人しいけど、実は放課後、街でケンカを売りまくっている。」って噂されてるぜ。マジで。誤解は早めにといたほうがいいぞ。

「修正を行う。」

長門が手をかざして高速呪文を唱え始めたそのとき、

ドッカーン！

大音響とともに部室のドアが開門。団長様の登場だ。かなり悪いタイミング。傷の修正？当然、まだできてねえよ。あーあ、こりゃひと悶着あるかもしれない。

「こんにちわーっ！！って、古泉君、どうしたの？イケメンが台無

しのケガじゃないの！」

「ちよつと転んで。」

「気まずい。かなりまずいぞ。この空気。」

「それでも、時計してるんだ。ねえ、どうしてこの時計に、そんなにこだわるの？」

古泉はハルヒの問いを黙殺して、指定席に座り込んだ。

「いい加減にしろ！」

「キヨン！」

「本人が嫌がっているのに、なんでそんなにしつこくせまるんだよ！」

「だって、気になるじゃないの！」

「そういう問題じゃないだろう！」

さすがに俺も今回ばかりは古泉の味方だ。大体、古泉が嫌だとあれほど言ってるのに、無理やり触ろうとするハルヒが悪いんだ。

「涼宮さん、そんなにこの時計が気になりますか？なら教えてあげますよ。」

やめる！お前、目が笑ってない。表情がやばくなっているぞ！

俺は長門にアイコンタクトをとり不足の事態に備える。

「この時計はある人の形見です。その方は、最後の力を振り絞って僕にこの時計を渡してくれました。そのとき、時計は血まみれでした。どんなに磨いても、とれない錆びがあるのですが、きつと、自分を死に追いやった犯人をずっと、ずっと恨んでいるのでしよう。」

「犯人って？」

「この時計の持ち主はある人に殺害されました。僕の目の前で殺されました。」

「そんな…」

さすがのハルヒも絶句する。

「涼宮さん、僕が嫌がるわけがわかりましたか？この時計はただの時計じゃない。だから、むやみに触れられたくないのです。」

「殺されたって？」

「ええ。そうです。殺人です。立派な殺人です。犯人は…僕です。」
「え？」

ハルヒがキョトンとし、朝比奈さんは大きな瞳をさらに大きくして、長門は1ミクロンほど目を大きくする。

「僕のせいで死んでしまったのです。僕を庇って、この時計の持ち主は死んだのです。僕が殺したようなものです。だから、この時計をつけるのは僕にとっては贖罪でもあります。」

むき出しにされたリスカットの跡。その傷を癒すように時間を刻む時計。

「でも、それは古泉君のせいじゃないでしょ？何でそうなるの？」

「涼宮さん、詳細をあなたは知らなくていい。これ以上知ってはいいけません。本当は誰にも知られたくなかった話ですが、あなたが、なかなか引き下がってくれないから、ここまで僕は話しました。そのかわりに涼宮さん、今後、この時計には絶対に触らないでください。どうかお願いします。」

「ハルヒ、古泉がそこまで言うてるんだ。団長様なら度量の大きいところを、みせてやれよ。」

「わかったわよ。」

まだ納得していない部分がありそうだったが、とりあえず無理やり腕時計に食いつくことはなくなった。

やがて果てしない夏休みがやっと終わった9月のある日、たまたま、部室が男2人状態になったときに俺は気がついた。まだ暑いのに、古泉は長袖のシャツを着ていて、袖が七部袖程度の長さになるように折っている。それでも目立つ腕時計、おや、新品じゃねえか。

「時計、買い換えたのか？」

「ええ。あの時計の後継モデルです。結構奮発しましたよ。」

「元の時計は？」

「初盆のときにご遺族にお返ししました。」

「そうか。」

「ご遺族の方は当初、亡くなる間に、自ら僕に直接手渡したという事で、あの時計を僕に持って置いてほしいとお願いされて、僕もずっとつけていたのですが、それで僕の過ちがなくなるわけではないし、朝比奈さんに「過去は帰ってこない」「死んだ人は帰ってこない」といわれたら…。それに、僕がこの時計を外さない限り、あの人はこの世に縛られたままになるような気がして、思い切って、ご遺族にお返ししたのです。」

確かに。ホンモノの「時をかける少女」朝比奈みくるに、そんなことを言われたら、ちよつとは変わるだろうな。古泉は苦笑いの表情を俺に向けた。

「あの人はせいせいしているでしょう。僕みたいなクソガキのお守りからやつと解放されたのですから。今頃亡くなった仲間と祝杯をあげているでしょう。」

「なあ、古泉。お前達がそこまで慕うリーダーって、どんな人だったんだ？」

「初めて会ったとき、「ああ、山の中でヒグマに襲われるってこういうことか。」と思いました。ええ、本当にヒグマのような大きな人でしたね。中学生の僕には、ヒグマとしか言いようがなかったです。背も高く、体も大きい人でした。亡くなる間際には「機関」の中でも、かなり高いポジションに付いておられました。僕たち現場の「超能力者」の代表として、何かあったら単身で上層部にも怒鳴り込むような人でした。閉鎖空間では何があっても平然としていて、すごい度胸の人だなと思いました。その人がバツクアップだと僕たちは安心して神人と戦えました。「超能力者」になる前は、会社勤めをされていたけれど、いつもみんなで「リーダーは会社員が一番似合わない」ってよくからかっていましたね。」

古泉は懐かしそうな目をして、窓の外に広がる、すっかり高くなつた空を眺めた。

「その人が亡くなった後、僕が、二代目のリーダーとなり、バツクアップポジションについたのですが、あの人には適わなかったです。

でもいつか、僕は、あの人みたいな大人になりたいと思っています。

「おまつ、リーダーって！？中学生のお前が、アレとの戦いの責任者だったのか？」

「仕方ありません。当時の超能力者達の中では、リーダーと僕が最古参のメンバーでした。そのリーダーが亡くなった以上、僕がやるしかなかったのです。」

「そうか。それはご苦労だったなあ。それに、お前がそこまで言うぐらいだから、本当にすごい人だったんだろうな。」

「ええ。だから、あの人が僕のミスで亡くなったとき、本当につらかったし、他の仲間にも申し訳なかったし、激しく荒れました。そのときばかりは涼宮さんを本気で殺そうと思いましたよ。」

「な！」

「大丈夫です。今の僕は、決して、そんな愚かなことはしません。もし、あの人が生きていたら「はあ？やめとけ。お前のトラウマがまた一つ増えるだけだ、ドアホ！」と一蹴されるだけですな。」

古泉は、楽しそうな、悲しそうな、なんともいえない苦笑いを浮かべていた。

俺はトイレに行くために一旦部屋を出ると、少しひんやりとした空気が流れてきた。秋が近づいている。俺も、そろそろ長袖のシャツとブレザーを出しておかないとな。

よかったな、古泉。もうすぐ安心して時計をつけられる季節だぞ。もうしばらく辛抱しろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0841o/>

僕らの自由、僕らの青春 4 -時間は受け継がれて-

2010年10月20日16時22分発行